

教育研究所だより



No.237 令和6年1月15日 【発行者】守山市教育研究所 所長 脇阪 久徳
守山市勝部三丁目9番1号(守山市生涯学習・教育支援センター 愛称:エルセンター 3・4階)
TEL:077-583-4217 FAX:077-583-4237
E-mail:kyoikukenkyu@city.moriyama.lg.jp
HP:http://www.city.moriyama.lg.jp/kyoikukenkyu_index.html

今年度の研修講座
全日程終了しました



新設しました指定研修も無事に終えることができました。今年度の反省をもとに、来年度の研修の計画をしていきます。ご協力ありがとうございました。



○第3回守山市初任者研修

令和5年10月27日(金)、第3回守山市初任者研修を実施しました。

午前、明富中学校 谷 優人 教諭による社会科の授業を参観し、授業研究会を行いました。「本時の目標に迫る授業実践であったか」という視点で、成果と課題、改善策をグループで話し合ったり、学校教育課 西村 幸太 指導主事から授業づくりのポイントについて指導助言をいただいたりして、教科指導や支援のあり方の知見を深めることができました。

午後は、「先輩から学ぶ学級経営」と題して、守山中学校 丘澤 慎之介 教諭と小津小学校 田村 匡孝 教諭のお二人からの講義と、当研究所 藪内 利奈 相談員から「守山市の教育相談の現状と、くすのき教室」について講話いたしました。

丘澤先生からは、「生徒の自立に向けてどのように子どもたちと関わっていくことが大切なのか」、田村先生からは、「安心してできる学級や子ども同士の関係づくり」について具体的に教えていただきました。藪内相談員からは、自分のセルフケアも大切にしながら、子どもたちが出すサインを見逃さず、その後の支援に連携して取り組んでいくことについて学びました。また、研修の終わりには、実際にくすのき教室の見学をしました。



【初任者の感想(一部抜粋)】

- ・子どもが主体的に学ぶ授業にするためには、まず子どもがやりたいと思える導入にすることや子どものつまづきを事前に予想しておくことが大切だと感じた。
- ・一人の子への支援がクラス全体のわかりやすい授業になるということを意識して、粘り強く子どもと向き合いたい。
- ・学級の一人ひとりが安心して学校に通い、学級の友達と関わったり、自分の悩みを話したりできるよう、教師として活動内容や見守り方を考え行動したい。

○第4回守山市初任者研修

令和5年11月24日(金)、第4回守山市初任者研修を実施しました。

午前は、速野小学校 龍 美来 教諭による「理科」の授業を参観し、授業研究会を行いました。前回同様「本時の目標に迫る授業実践であったか」という視点で、グループで話し合いました。また、学校教育課 明山 雅子 指導主事から授業づくりや学級づくりについての指導助言をいただき、教科指導のあり方だけでなく、学級経営についての知見も深めることができました。



午後は、保育園・幼稚園・こども園所属の初任者も参加し、大垣女子短期大学 川島 民子教授より、「特別支援教育のあり方」についてのご講義をいただきました。「困った子ども」ではなく「困っている子ども」と捉えていくことで支援の仕方、背景を考える見え方が変わることを学びました。また、インシデントプロセス法という手法でのケース会議を体験し、子どもたちの背景を探るためにはどのような視点が大事か実践的に学びました。



【初任者の感想(一部抜粋)】

- ・児童・生徒観を踏まえて、授業の展開を作っていくことが必要だと学んだ。教科で学んでほしいこと、目の前の生徒の様子をかけ合わせて授業をつくっていくことを意識していきたい。
- ・インシデントプロセス法を用い、頭の中で考えるだけでなく、紙に書きだしたり、他の先生方と話したりすることで新たな支援の方法を見つけることができると学んだ。

○指定研修【受講者の感想～全4回を振り返って(一部抜粋)】

第4回 ボトムアップ研修 (小学校)

令和5年10月17日(火)

○仲間の授業から学ぶ

小津小学校 2年A組

稲垣 瑠花 教諭(体育科)

講師 学校教育課 小川 宏 教育支援アドバイザー



- ・2校目の先生方と話し合う場があることで、向上心が高まり、共有し合うことで安心感をもって日々の学校生活につなげることができた。
- ・これからの自分はやってみたいことを試すことはもちろんだが、それをきちんと振り返り、よいことは次につなげるように、よくなかったことは改善できるように一つひとつ振り返っていきたい。

- ・自分の授業スタイルは確立しているが、クラスや個によって学力差や課題が様々なので、同じ授業はできないと感じている。“対応力”を大切に、努力を積み重ねたい。
- ・自分のやり方に固執せず、多くの先生の良い方法を吸収する姿勢が大切だと思った。

第4回 ボトムアップ研修 (中学校)

令和5年10月31日(火)

○仲間の授業から学ぶ

守山南中学校 1年1組

安田 忞成 教諭(数学科)

講師 こども政策課 藤村 厚 専門員



第4回 ステップアップ研修 令和5年11月14日(火) (守山小学校)

○先輩の授業から学ぶ

守山小学校 6年1組

永田 粹 教諭(社会科)

講師 学校教育課 大西 健之 教員支援アドバイザー
学校教育課 水野 恵 こども支援コーディネーター



- ・研修を通して、授業を行ううえでの大切なところや育てていくべきところを学び、先輩の先生方から何を吸収していけばよいのかが分かった。
- ・授業づくりにおける発問の研修では、子どもが主体的に深く学べるような問い方を身につけることができた。2学期以降、授業を考える際には発問を意識するようになった。

- ・同じ2年目なのに、自分が思いつかないようなアイデアをもっておられた。同じ2年目の先生ができるのだと思うと、自分もいろいろな取り組みをしていきたいと思った。
- ・他の学校の先生と意見を共有し合えたことで心がほっとして少し心にゆとりができた時間になったのがうれしかった。

第2回 2年次研修 令和5年11月21日(火) (エルセンター)

○学級目標について

○学力差への対応

○早く帰るために心がけていること



子どもに限らず、大人でも「～しなさい」と強制されることは気持ちのいいものではありません。ケガをするような危ないことについては、注意したり叱ったりすることが必要ですが、「～しなさい」と言わなくてもいい場面でも、大人から子どもへ「～しなさい」と言ってしまうことは多いのではないのでしょうか。国際コーチング連盟プロフェッショナル認定コーチの石川尚子さんは、子どもが自分で考えて動けるような言葉かけの工夫をされています。参考にしていただけると嬉しいです。

☆子どもの言動を実況中継する

(前略)これは、日頃から実況中継の言葉を意識的にかけているという学校の先生がおっしゃっていたことです。「指示命令形の言葉は、子どもを否定する言葉なんです。『できていないよね。やりなさい』と。一方で、『～しているね』は、子どもの存在を認める言葉なんです。私が『～しているね』と言うようになってから『～しなさい』と言わなくても子どもたちは自分で考えて動くようになりました」自発性を引き出す、まさにコーチングのアプローチです。

☆できていることを事実と気持ちで伝える

実況中継の言葉の後には、いつもI(アイ)メッセージで自分の気持ちや感謝を伝えるようにしています。Iメッセージとは「私は」を主語にして伝える言葉です。「私のほうを向いて聴いてくれますね。とってもうれしいです」(中略)などです。Iメッセージで言われると自分の行動が相手に与えた影響を感じることができます。自分の行動がこの人をこんなプラスの気持ちにさせたんだと思うと、またそうしたいと思います。ですから、できていないことを注意するのではなく、できているときにこそ、できていることを事実と気持ちで伝えていきます。(後略)



☆Let's のスタンス

(前略)「～しなさい」「～しないで」を「一緒に～しよう」と言い換えてみるとこのようなイメージです。「もう時間だよ。早く教室に入りなさい」→「もう時間だね。一緒に教室に入ろう」(中略)注意する側も「～しなさい」「～しないで」と言い続けると、気持ちが疲弊していきます。「一緒に～しよう」と言うことで、穏やかになれる気がします。



☆価値を尋ねる質問

(前略)「もっと勉強しなさい」と、決して言わない先生がいらっしゃいます。その代わりに「勉強するとどんな良いことがあるかな?」と問いかけて、子どもたちと一緒に考えます。「テストでいい点がとれる」「頭がよくなる」といった答えばかりでなく「自分に自信がつく」「やる気が湧く」「自分の未来が明るくなる」といった答えまで出てくるそうです。そうすると、勉強は「しなければならぬもの」から「自分にとって良いもの」になっていきます。おのずと、やる気のスイッチが入ります。「勉強しなさい」と言うより、よほど効果があるのです。自分で価値を感じることで、子どもたちは自然と行動を起こします。



☆身体ではなく心を動かす

注意をして、強制的に相手の体を動かすことができたとしても、心が動かなければ、その行動は一時的なもので終わります。注意をし続けなければ動かない子どもになってしまいます。しかし、子どもの心が動けば、身体はおのずと動きます。学校でも家庭でも「そうしたほうがいいな」「そうしたいな」と、子どもが自ら思えるかかわりが当たり前になされるといいなと思います。一言で言うと「相手を尊重したかかわり」です。このかかわりこそが、大人も子どもも幸せにするのではないかと感じます。

参考 月刊学校教育相談 2023年10月号 石川尚子さんの文章(P10~12)より

